

音楽の散歩道 **その10の8**

— ベートーヴェンの「第9」200年記念 —

悲しみと苦悩に満ちた真実のショパン、ショパンを見守るサンドとリスト(3)

鹿児島市	粟 博志
東区・荒田支部	粟 隆志
大海クリニック・大海宮崎クリニック	大西 浩之・海江田 寛
加治木温泉病院	夏越 祥次

(つづき)

1. モーツァルトのウィーン時代晩年の3つのオペラ・ブッフア。「フィガロの結婚」, 「ドン・ジョバンニ」, 「コシ・ファン・トゥッテ」

「フィガロ, 初演ウィーン 1786」, 「ドン・ジョバンニ, 初演プラハ 1787」は、プラハでは驚異的大歓迎を受けたが、ウィーンでの人気は盛り上らず、プラハとは、大違いであった。

皇帝ヨーゼフⅡ世の依頼を受けて作曲した「コシ・ファン・トゥッテ, 初演ウィーン 1790」も、評判はそこそこであった。

然も 1790 年には、皇帝も死去した。

今日、モーツァルト晩年の傑作と言われる、

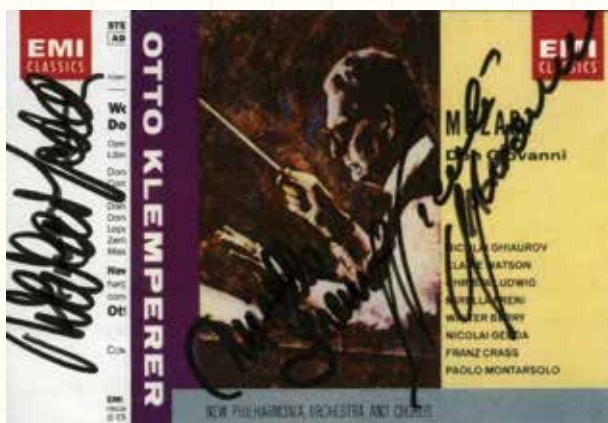


図158 オットー・クレンペラー指揮「ドン・ジョバンニ」, 1966録音

これらの名曲のLP, CDの指揮者、歌手は、歴史的演奏家が目白押しである。

図158のCD「ドン・ジョバンニ」は、1966

年のオットー・クレンペラー指揮で、ミレツラ・フレニ、ニコライ・ギャーロフのサイン入りである。

2. モーツァルトの3つのオペラ・セリア。「ルチア・セラ」, 「イドメネオ」, そして「テイトの慈悲」

前号では都合で、「イドメネオ, 初演ミュンヘン 1781」のみ紹介し、他の2曲を割愛したが、本号では、他の2曲のオペラ・セリアに言及する。

モーツァルト父子は、3度のイタリア演奏旅行を行い、当地でモーツァルトは大歓迎を受け、大変な名誉を与えられ、音楽的には充実した時期で、多くを学び、多数を作曲、オペラも3曲を作曲した。

「ポントの王ミトリダーテ, 初演ミラノ 1770」, ミラノ大公・フェルディナンドの結婚式の為の祝典劇、「アルバのアスカニオ (アスカーニョ), 初演ミラノ 1772」, それに「ルチア・シラ (ルーチョ・シッラ), 初演ミラノ 1772」である。

これらの3曲は評判もよく、大成功と言ってもよいかもしれない。ここでは最後の「ルチア・シラ」に言及する。

1772年、16歳のモーツァルトの父子がイタリア演奏旅行中に、ミラノ大公に謝肉

祭の為のオペラを依頼された。

ミラノ大公の臨席の元、初演されたオペラ・セリア、「ルチア・シラ」である。

古代ローマの独裁執政官・シラが称号を返上して、市民に執政官選択の権利を回復させるという筋書で、当時の名歌手、アンナ・デアミーチスも出演し、謝肉祭の期間中、大評判を取めたのである。

モーツァルト父子は、「ルチア・シラ」を含め、これまでのミラノでの仕事、イタリアでの業績により、ミラノでの就職を掛けていたが、望みは叶わなかったし、「ルチア・シラ」も表舞台から姿を消した。



図159 オペラ・セリア「ルチア・シラ、1961録音」世界初録音

図159は、カルロ・チラリオ指揮、1961年録音の「ルチア・シラ」である。

この全曲録音は世界初のものである。

世界初録音は、その曲の重要性に気付き、世に知らしめる事であり、その価値は高い。

イタリア・オペラ界でメゾ・ソプラノの頂点に立ったフィオレンツァ・コソットの若々しいサインも、なかなかよい。

ミュンヘンでの「イドメネオ」は既に述べた所である。

モーツァルトの最晩年の1791年、「魔笛、初演ウィーン1791」と同年に、神聖ロー

マ皇帝・レオポルド二世のボヘミア王即位の戴冠式の為に依頼され、ボヘミアのプラハ国立劇場で9月6日に皇帝夫妻臨席の元に初演されたのが、オペラ・セリア、「ティト（皇帝ティトス）の慈悲」である。

モーツァルトを宮廷音楽家に任命してくれた皇帝・ヨーゼフ二世の死去に伴い、弟のレオポルド二世が、皇帝に即位したのである。

オーストリア（ハプスブルグ家）の神聖ローマ皇帝は、ボヘミア国王他も兼任しているのである。

このオペラは、ローマ皇帝・ティトスが、自分がその座を奪った先帝の娘・ヴィットリアを娶るが、それ以前にヴィットリアが愛人に父の復讐、つまりティトスの殺害を唆し、失敗する。

然し慈悲深い皇帝は、それを許すという、皇帝の寛大さをテーマにした曲である。

然し、レオポルドの妻、皇后マリア・ルドヴィカは、この曲を嫌悪したと言われ、この曲は失敗作となった。

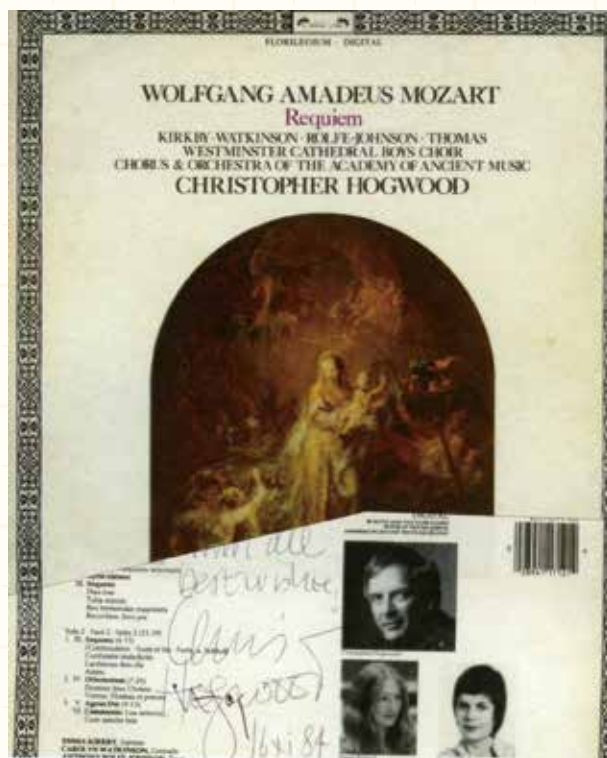


図160 ホグウッド指揮「レクイエム、1983録音」

その後、モーツァルトはプラハからウィーンに戻ったが、この頃から体調は悪化。

9月30日には、「魔笛」の初演にこぎつけ、その後、「レクイエム」の完成を急いだ。結局その完成に至らず、モーツァルトは12月5日に死去した。

図160は、クリストファー・ホグウッド指揮、1983年録音の「レクイエム」である。

ホグウッドは、オリジナル楽器のアンシャン室内楽、Orchestra of the Academy of Ancient Musicを率い、モーツァルト交響曲全集(1978-85)を完成させた。

ホグウッド1984年のサインである。

### 3. モーツァルトそしてモーツァルトのオペラ・セリアは、3人のマリアに嫌われた。そして全て表舞台から消えた。

モーツァルトのオペラ・セリアは表舞台から消え、20世紀中頃まで忘れ去られた。なぜだろう？

今まで、この問題に焦点を当てた人は誰もいないし、関心すら持っていない。

以下は全て私の個人的見解である。

なお私にとって最も重要な関心事は、3人のマリアの一人、マリア・カラスがモーツァルトのオペラの全曲録音を、1作品も残さなかった事である。

ここでの3人のマリアとは、マリア・テレジア、マリア・ルドヴィカ、マリア・カラスの歴史上の3人である。

彼女達の女性の視点に立って、モーツァルトの人間像、オペラ作品を評価しよう。

幸い私は、音楽を生業としていないので、何の付度無しに意見を述べる事とする。

なお群雄割拠の18世紀のヨーロッパの女性の頂点に立つ女性達は、音楽、文学、語学、歴史などの高度な教育を受け、**合理的精神、自立精神**を養いながら育っている。



図161 ハブスブルグ家の女継承者、神聖ローマ女帝、マリア・テレジア（この絵画はハンガリー女王として）

神聖ローマ皇帝・カール VI 世の長女として生まれ、「女帝」「神聖ローマ女帝」と呼ばれたオーストリア大公女、ハンガリー女王、ボヘミオ女王である「マリア」こそ、ハブスブルグ家初の女性後継者となった「マリア・テレジア (1717-1780)」である(図161)。

もちろん彼女は周囲の列強に対応できるよう、独・伊・仏・ラテン語は自由に話せた。

父の死後、1740年にマリアを女性と侮り、マリアの広大な領土を分割しようと、フランス、スペイン、プロイセン王国、更にはバイエルンおよびザクセン選帝侯が攻め込んできた。「オーストリア継承戦争」である。

彼女は、ハンガリー女王でもあり、オーストリア・ハンガリー軍を率い、これらの敵と交戦し、継承を認めさせた(1748)。

更には、18世紀の世界大戦、「七年戦争、1756-63」でも耐え抜いた女帝である。

彼女は、啓蒙主義による近代国家への道を押し進め、復興、国力の回復に努めた。

例えば、教育を重視し、小学校の新設、ウィーン大学医学部の死体解剖を許容した。

彼女は、16人の子を生んだ。

夭逝する子供も多く、確実な男子後継者を育てる事、政略結婚による姻戚関係で、国の安定・安全を図ったのである。

娘、マリー・アントワネットを仏国王・ルイXVI世に嫁がせたのも、その一例である。

彼女の夫は、神聖ローマ皇帝・フランツI世であるが、男など何するものぞ、である。

マリア・テレジアは、6歳のモーツァルトに宮殿で大礼服を与えた（前号図151）。

マリアが、モーツァルトの演奏に感動したのは、間違いなからう。然し、質実剛健な彼女が与えた服は、息子のお古だった。

モーツァルトの才能を認めながらも、小学校新設などの近代化を押し進める彼女にとって、モーツァルト父子の演奏旅行が一時的なものならともかく、長期に亘り父が子を連れて、金稼ぎの旅を続ける親子に、マリアが好感を持つはずが無かった。

ミラノ大公が、ミラノでモーツァルトを雇用しなかったのは、マリアがミラノ大公に、このようなモーツァルトを雇用すれば、家臣達に悪影響を与えるので、雇用しないように、と密かに釘を刺しておいたからである。

これは、マリア・テレジアの意向であり、ミラノ大公も従わざるを得なかった。

なぜなら、ミラノ大公は、マリアの4男だったからである。

オペラ・セリア「ルチア・シラ」は間もなく、上演される機会を失ったのである。

モーツァルトのせいではないが、モーツァルト親子は、音楽ではなく、その生き方を嫌われたのであり、それにより音楽も消えたのである。

2人目のマリアに於けるオペラ・セリア、「ティトの慈悲」の場合は、事情は異なる。

マリア・テレジアの長男・ヨーゼフII世が

死去し、次男のレオポルドが、神聖ローマ皇帝・レオポルドII世として即位し、更にボヘミア王としての戴冠式での「ティトの慈悲」は、皇后マリア・ルドヴィカ（1745-92、スペイン名はマリア・ルイザ）が、この曲そのものを嫌悪したと言われる（図162）。



図162 マリア・テレジアの次男、神聖ローマ皇帝・レオポルドII世の皇后、マリア・ルドヴィカ

彼女も又、賢明な女性であった。

マリアは、スペイン国王・カルロスIII世の娘であり、プライドも高かった。

何ごとにも華麗、華美を誇るスペイン王室から、ウィーンに嫁いできた彼女は、質実なウィーンの家風に直ちに順応した。

マリア・ルドヴィカも、16人の子を儲け、長男は神聖ローマ帝国を継いだ。

マリア・テレジアとマリア・ルドヴィカは、共に多産で帝国の安定に尽したが、各々の夫には愛人がいた。

2人共、表面的には夫に寛大ではあった。

個人的な問題で事を荒立てるのは、プライドが許さなかったのか、など彼女達の心中を窺い知る由もない。

そんなルドヴィカは、当然、モーツァル

トの「フィガロ」や「ドン・ジョバンニ」を知っていただろうし、賢明でプライドの高いルドヴィカは、当時ですら下品で、男性が女性を侮辱し、差別しているともとれる、これらのオペラ・ブッファを嫌悪していたに違いない。

地方都市のプラハとは異なり、帝都・ウィーンでモーツァルトのオペラ・ブッファの人氣が無かったのも、教養ある女性達の共感が得られなかったからかもしれない。

ルドヴィカが、プラハでの「タイトの慈悲」に嫌悪感を示したのは、もともとモーツァルトに嫌悪感を持っていたからか、更に愛人まで出てくるこのオペラ自体にも、嫌悪感を抱いたのかは定かではないが、いずれにせよ、ルドヴィカが、モーツァルト自身を嫌っていた事は、十分想定できる。

男に劣る事は無い、男には決して負けな  
いと言う強い自負心（これは疑いもなく現代に通ずる思想であるが）を持つ2人のマ  
リアにより、モーツァルトのオペラ・セリ  
アは、歴史の表舞台から姿を消した、とい  
うのが、私の説である。

マリア・カラスも、基本的には、オペラ・ブッ  
ファを好まなかった（後述）と思われる。

つまり、モーツァルトそしてモーツァルトの  
オペラは、3人のマリアに嫌われたのである。

#### 4. マリア・カラスは、なぜモーツァルトのオ ペラの全曲録音を1作品も遺さなかつ たのだろう。

マリア・カラスは、オペラを舞台で演じ、  
歌い続けた。彼女が遺した映像は少ないが、  
膨大な数の全曲録音を遺した。

私達は多分、これらの全曲録音から、彼女  
の舞台姿を連想する事ができる。

彼女の遺してくれたLP（CD）は、貴重な  
音楽遺産である。

それ故、モーツァルトほどの高名な音楽

家のオペラが、1作品も遺されなかったの  
は、極めて重要な問題なのである。

1923年にニューヨークに生まれたカラス  
は、1937年、14歳の時に母の故郷ギリシャ  
に戻り、翌年アテネ音楽院に入学し、住年の  
名歌手・イダルゴにオペラを学んだ。

将来、イタリアで活動するためのイタリア  
語の会話は、3ヶ月でマスターしたと言う。

1939年、「カバレリア・ルスティカーナ」  
で舞台デビュー。1941年、「ボッカチオ」、1942  
年、「トスカ」でアテネ王立劇場に出演する  
など、目覚ましい活躍を続けた。

彼女は、1曲のオペラを1週間でマスター  
する驚異的能力を有していた。

「カラスの前にカラス無く、カラスの後に  
カラス無し」と言われた不世出の歌唱力、恵  
まれた容姿と圧倒的な演技力で、観客を魅了  
したカラスには、それ故、マスコミなど敵対  
する相手も多かったという。

マリア・テレジア、マリア・ルドヴィカ  
の時代同様、依然として女性の人権の弱  
かったマリア・カラスの活動期に、彼女は  
女性の人権意識を強く持っていた。

彼女の信条は、道徳を大切に、善悪をはっ  
きり見分け、プライド高く生きる事であり、  
公平こそが最も大切で、不公平に対しては、  
あくまで抵抗した（インタビューより）。

女性として差別される事や、男性から強権的  
な言動を受ける事に対しては、正面から対抗す  
る女性であった。

カラスは、舞台上で演じ歌う事により、そ  
れまでのオペラの価値を再認識させると共  
に、歴史に埋もれていた、多くのオペラを  
蘇演した、オペラ発掘の偉大な開拓者で  
あった。

数多く残されたカラスのインタビューの  
内容からすると、カラスがオペラ・ブッファ  
の全曲録音を遺さなかった事は、十分理解

できるし、オペラ・セリアに関しては、カラスの時代まで陽の目を見なかったため、カラスの注目を引くには至らなかったのだろう。

(なお、カラスの全盛期の1950年代末まで「イドメネオ」は、50, 56, 57年の3作、「ティトの慈悲」は、51, 55年の2作の全曲録音が残されたが、カラスの注目を引くものでは無かった。演奏者には敬意を表したい)

もちろん、台本のストーリーを考えず、音楽のみを評価すれば、曲自体のみのよさは、認めていた。従ってリサイタルでは、カラス

は数曲を歌っており、録音が遺されている。

☆注意:オペラのアリアに『題名』はない

オペラのレチタティーヴォやアリアには「題名」はない。

例えば、「蝶々夫人」の『ある晴れた日に』は、題名ではなく、「Un bel di, vedremo……」という歌い出しの歌詞である。

「トスカ」の『歌に生き、恋に生き』は、題名ではなく、「Vissi d'arte, vissi d'amore……」という歌い出しの歌詞の日本語訳である。従って曲によっては、訳者により、日本語訳が異なる事も生じる。(注意おわり)



図163 マリア・カラスとモーツァルト  
左は「マリア・カラス、ダラス・リハーサル、1957」、中は「マリア・カラス、珍しい演奏曲、1953-65」、右は「ジュリアードのマスター・クラス、1971-72」

マリア・カラスのCDにモーツァルトの曲の歌唱が、数点遺されている。

図163左は、「マリア・カラス、ダラス・リハーサル、1957」で、「後宮からの逃走～」が遺されている。

図163中は、「マリア・カラス、珍しい曲1953-65」で、「ドン・ジョバンニ～」が遺されている。

図163右は、カラスの講義の記録、「ジュリアードのマスター・クラス、1971-72、3CD」である。この中に、「ドン・ジョバンニ」が取り上げられている。

図164は、講義を単行本に起こしたものである(ジョン・アードイン著,1987 英文)。

カラスに関しては、録音に残された膨大なインタビューは、全てCD化されている。

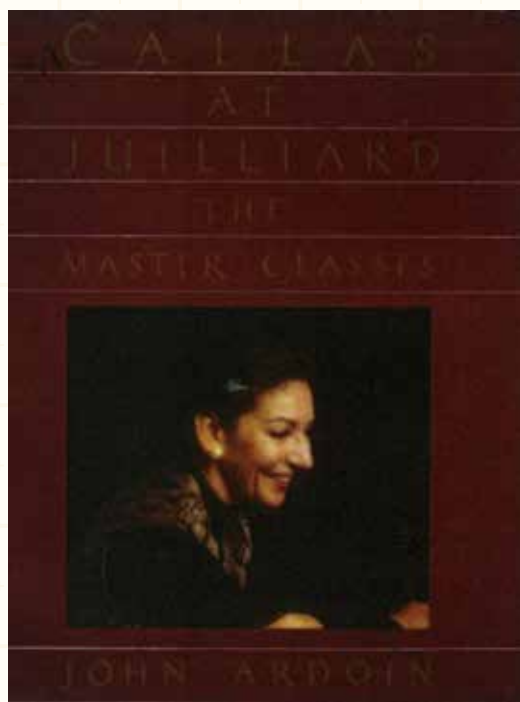


図164 「ジュリアードのマスター・クラス、英文」

## 5. 私の貴重なモーツァルトのLP (CD)

ここでは、モーツァルトに関連した、古いLPを紹介する。日本で唯一のものだろう。なお、名前の後ろの( )内の数字は生年。

### (1) ピアノ曲

#### ● リリー・クラウス

モーツァルト弾きの歴史的ピアニストと言えば、クララ・ハスキルとリリー・クラウス(1908)が挙げられるが、系統的に録音を遺したのは、リリーである。

彼女は、20歳でウィーン音楽院の教授と



図165 リリー・クラウスのP協奏曲



図166 リリー・クラウスの歴史的演奏会のプログラム

なった逸材で、今日ではともかく、当時、ハンガリー人、然も若い女性が、この音楽院の教授になる事など、全く考えられなかった。

図165は、P協奏曲である。

図166は、1966-67シーズンの歴史的な、NYでの全曲連続演奏会のプログラムである。

全日程や曲の紹介など、全23頁に及び、彼女と指揮者のサイン入りが嬉しい。

#### ● マルタ・アルゲリッチ

マルタがモーツァルトのPソナタを弾くとは、当初、全く想像できなかった(図167)。

然し、1980年代に入り、演奏・録音スタイルが変わり、ソロ演奏が少なくなった。

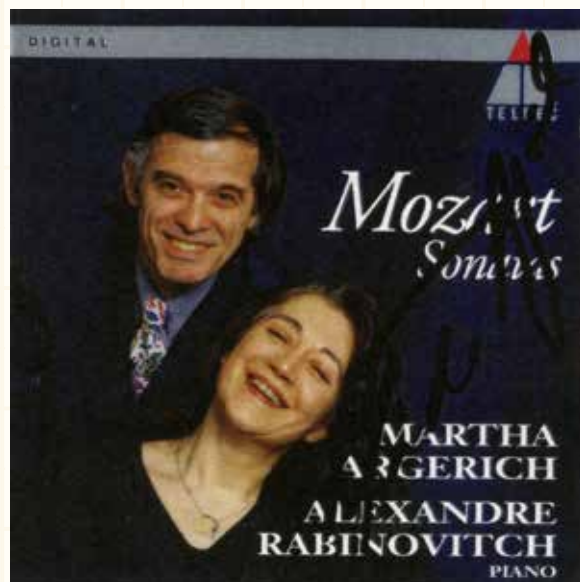


図167 マルタ・アルゲリッチ、ピアノ・デュオによるPソナタ、CD

自分の楽しみの為の、仲間との気楽な音楽(それを好む人もいないかもしれない)に移行した。このCD(1993録音)を手にし、マルタしか弾けないような、もっと後世に残すような重要な曲があったらと言いたい。

モーツァルトに一生を掛けるピアニストも多いのだから。結局彼女は、私達に何を残すのだろうか?(サインは右下)。

#### ● エミル・ギレリス

ギレリス(1916)は、20世紀のソ連で、リヒテルと並ぶピアノの巨匠であった。



図168 リヒテル父娘のデュオによる「P協奏曲」

ここでは、娘エレナとP協奏曲を弾いており、2人のサイン入りのLP（1972録音）である。ベーム指揮、ウィーン・フィルとバッ

クも豪華である。ぜいたくな家庭サービスと思えば、ギリギリ許せる（図168）。

●モニク・アース、ゲザ・アンダ、イラナ・ヴェレド

仏の女性ピアニスト・モニク（1909）は、トビュッシー、ラヴェルらの演奏で知られる名ピアニスト（図169、左）。

ブダペスト出身のゲザ・アンダ（1921）は、モーツァルトのP協奏曲全集も完成している（図169、中）。

イラナ（1943）は、70年にモシユコフスキの「15の練習曲」の世界初演・録音を行った。ミュージック・フェスト・ペルージャを設立した（図169、右）。



図169 名ピアニスト達 左はモニク・アース、中はゲザ・アンダ、右はイラナ・ヴェレド

(2) 交響曲

●ヘルベルト・ブロムシュテット

アメリカ生まれ、スウェーデン育ちのヘルベルト（1927）は、シュターツカペレ・ドレスデンなどで指揮活動を行った。

図170は、交響曲第38番「プラハ」、CD、1982録音。



図170 ブロムシュテット「交響曲第38番・プラハ、1982年録音」、CD

●ジェラード・シュワルツ

アメリカ生まれのジェラード（1947）は、ロスアンジェルス管弦楽団の音楽監督などとして活動。84年、NYの「モーストリー・モーツァルト・フェスタ」



図171 ジェラード・シュワルツ「交響曲第41番・ジュピター、1981録音」

の音楽監督にも就任。図171は、交響曲第41番「ジュピター」、1981録音。

図172 歴史的大家手によるリサイタル



a. マリア・ライニング



b. マリア・ライニング (裏面)



c. エリナー・スティーバー



d. エリナー・スティーバー



e. マーガレット・プライス



f. マリリン・ホーン



g. ミレツラ・フレニ



h. エディット・マティス



i. ルチア・ポップ



j. キリ・デ・カナワ



k. ジェシー・ノーマン



l. kのボックス裏面

### (3) 歴史的な大歌手によるリサイタル

図 172 の a~l で示す。

#### ● マリア・ライニング (1903) (a,b)

マリアはオーストリア生まれ、ウィーンの名ソプラノで、ウィーン、ミュンヘン国立歌劇場で活躍。モーツァルト、ワーグナー、R. シュトラウスなどで名を残す。

#### ● エリナー・スティーバー (1914) (c,d)

米のリリック・ソプラノのエリナーは、1940年のメットのデビュー以来、約20年間、プリマ・ドンナとして活躍した。



図173 20年間メットのプリマであり続けたエリナー、ドンナ・アンナ役の大型ポートレート

メトロポリタンとミラノ・スカラ座は、一度でも主役で出演すれば、大変な名誉であるのに、20年間も続けた事は、すごい。

図 173 は、「ドンナ・アンナ」役の大型ポートレート。LP は 1953 年録音。

#### ● マーガレット・プライス (1941) (e)

イギリスのソプラノのマーガレットは、ベーム指揮の「イドメネオ」で、1973年にザルツブルグにデビューした。LP 録音

1975 年。

モーツァルトのオペラを多く歌った。

#### ● マリリン・ホーン (1934) (f)

アメリカのメゾ・ソプラノでロッシェニ歌手として高名。メゾの歌唱技術を飛躍的に向上させた功績は、非常に大きい。

#### ● ミレッラ・フレニ (1935) (g)

イタリアのリリック・ソプラノ。63年、カラヤン指揮、スカラ座の「ラ・ボエーム」のミミで大成功した。

ただ、64年のカラヤン指揮の「椿姫」では、大ブーイングを浴び（カラスのファンから）、以後、スカラ座では、（カラス熱が冷めるまで）30年間、「椿姫」が上演されなかった（封印）という歴史をつくった。

この1965年のLPは、「スカラ座の期待のスターのリサイタル・デビュー」盤とある。

#### ● エディット・マティス (1938) (h)

スイスのリリック・ソプラノ。モーツァルトに定評があり、「フィガロ」「魔笛」などを残した。ウィーン国立音大教授も勤めた。

このLPのサインは、73年の「エディンバラ・フェス」に際して、フリーメイソン・ホールで貰っている。モーツァルトは、フリーメイソンで有名。LPは73年録音。

#### ● ルチア・ポップ (1949) (i)

チェコのコロラトゥール・ソプラノで、ウィーン国立歌劇場を中心に活躍。

70年代には、ヤノヴィッツと共に、ドイツを代表するソプラノであった。

#### ● キリ・テ・カナワ (1944) (j)

ニュージーランド出身のリリコ・スピント・ソプラノ。モーツァルト、R. シュトラウスに定評があった。チャールズ皇太子、ダイアナ妃の結婚式でも歌った。エリザベス女王よ

り、デーム・コマンダーを授与された。  
指揮者も「サー」である。1983年録音。

● **ジェシー・ノーマン (1945) (k,l)**

アメリカのドラマティック・ソプラノ。

彼女は、レーガン、クリントンの大統領就任、エリザベス女王の環暦、仏200周年、バルセロナ、アトランタ・オリンピック開会式などで歌った。このLPは、1978年の「モーツァルト生誕222年、音楽家世界相互援助基金ガラ・コンサート」のドキュメントLP (図174)。



図174 「モーツァルト生誕222年、ガラ・コンサート、1978」ネヴィル・マリナー指揮、ジェシー・ノーマンとブレンドル

(4) その他の楽器

● **アイザック・スターン (1920)**



図175 アイザック・スターン、ヴァイオリン ジョージ・セル指揮、コロムビア響

ウクライナ生まれの彼は、1歳前にサンフランシスコに移住。20世紀を代表するヴァイオリニストである (図175)。

● **ジャン・ピエール・ランパル (1922)**

医大を退学し、パリ音楽院に入学した彼はわずか半年で卒業した。



図176 ジャン・ピエール・ランパル、フルート

マルセル・モイーズ、ガッゼローニ、オーレル・ニコレと共に、20世紀を代表するフルート奏者である (図176)。

● **クルト・レーデル (1918)**



図177 クルト・レーデル、フルート

ドイツの指揮者、フルート奏者で、20歳

でザルツブルグ・モーツァルテウム音大教授となる。ミュンヘン・プロ・アルテ室内管弦楽団、ルルド音楽祭を創設した（図 177）。

● ジョエル・ベルナール（バーナード）

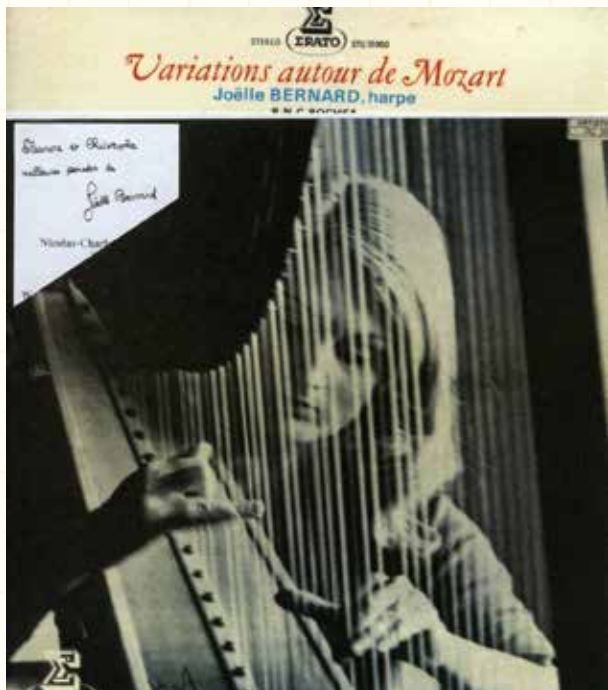


図178 ジュエル・ベルナール、ハープ

ハープと言えば、リリー・ラスキーヌであろうが、サイン入りが無いので、ジョエル・ベルナール、モーツァルトのPソナタ第15番、K. 545のハープ編曲を挙げておく。

1976年録音（図 178）。

（つづく）